

## 社会科教科主張

### 1. 社会科における学び

我々は、子どもが社会的事象の追究を通し社会認識を深め「将来にわたって自分とみんなの幸せを実現していくために、自分はどう生きていくか」を問い続けることが、社会科の本質であると考えている。

社会認識は、社会的事象の背景にある人の営みに目を向け、その根本にある人々の願いや情意に思いを致していくことで、はじめて深まっていくものである。子どもは、社会的事象に出会うと、自らの目的をもち、観察や調査、資料の収集や分析など追究を始める。その過程で、社会的事象に携わる人々の工夫や努力、苦心等について考えることで、その人の生き様や、その根底にある願いに気づき、社会的事象について再解釈していく。また、対話をくり返す中で「本当にそうなのか」「このままでは…」「これでよいのか…」などと考え、社会的な見方や考え方を働かせながら、社会的事象について自分なりに価値判断していく。このような営みをくり返すことで、子どもは社会に生きる人々の様々な工夫や努力、その根底にある願いに心から感動したり、自分自身の成長を実感したりして、自らの価値観を更新するとともに、自身の生活や行動を見つめ直していく。

### 2. 本校社会科部が考える『その子らしく学ぶ』

「汽笛よ 再び～大井川鐵道がつなぐもの～」の実践では、『大井川鐵道の不通という危機的状況の中でもUさんたちが飲食店を続ける理由』について議論した。B子は、仲間の「正直お金（儲け目当て）でしょ」という発言に対し「絶対それだけじゃない！お客さんに喜んでほしいって思いが大事なんだよ！」と激しく反論した。飲食店を自営する家族の姿をそばで見えてきたB子ならではの発言である。この発言には、自身の生活経験に裏打ちされたB子の感性が表れている。「儲けだけが店を続ける目的ではないはずだ」というB子のこだわりが、彼女にとっての切実な問いを引き起こしたのだろう。その後、B子は家族へのインタビューを通じて自身の考えを深めていった。こうした姿こそ、自身の切実な問いに対してまっすぐに向き合う姿として大切にしていきたい。

「ごみを出す その先に」の実践では、実際にごみ収集作業員の方に出会い話を聞き、ごみ集積所の見学だけでは得られなかった事実と出合った。A男は、収集業務の裏にある人たちの努力や苦勞に心を動かされ、「もっと生活からごみを減らそうとした」と考えるようになった。また、その過程では、仲間の提案する学校をきれいにする取り組みに矛盾を感じ、懐疑的に考えたり、他の人の視点からも客観的に考えようとしたりする姿勢が見られた。単に受け入れるのではなく、異なる視点から考え、自分なりのアプローチを模索したA男は、ごみの減量や再利用という具体的な行動に目を向けていった。A男は、自身の生活の中でどのように行動していけるかを考え始めており、社会の問題を自分のこととして捉えているといえるのではないかな。このように学びを積み重ねることで、社会的事象を捉え直し、社会認識を深めていくことこそが、社会科の学びの本質だと考える。

以上のことから、本校社会科部では「社会的事象に出合ったその子が、生活経験に裏打ちされた感性をもとにしながら、明らかにしたくなった問いについて、じっくりと追究していくことで、社会的事象について再解釈・価値判断していった結果、その子が自分自身の社会認識を深めたり、現実社会における自分自身の生き方を見つめたりしていく姿」を、社会科における『その子らしく学ぶ』であると考え、研究を進めている。

### 3. 『その子らしく学ぶ』子どもを支える環境設定

(1) 子どもの目的と重なる、社会的事象に携わる人物との出会いを設定する

- ・子どもが社会的事象に関心をもち「聞いてみたい！」「もっと知りたい！」という思いや問いをもつタイミングで人物との出会いを設定する。
- ・子どもが社会的事象を自分事として考え始め「このままでは…」「どうしてだろう」と、切実感をもつタイミングで人物との出会いを設定する。

(2) 子どもが問いや思いをより切実なものにできるような資料との出会い方を工夫する

- ・子どもの追究意欲が高まっていくような資料を例示する。
- ・価値観が揺り動かされたり、広がったりするような追加資料を提示する。

(3) 子どもが自分の思いや考えを確かなものにするための場を設定する

- ・資料について解釈したことを語る場。(表出)
- ・お互いの考えや価値観をぶついたり、認めたりする場。(共有)
- ・根拠となる事実を吟味し関連づけたり、振り返ったりする場。(自己内対話)

## 社会科部『その子らしく学ぶ』研究3年次の成果と課題

坂井 遥 原 亨介 水嶋 俊介

### 1. はじめに

本校社会科部は、子どもが社会的事象の追究を通して社会認識を深め、「将来にわたって自分とみんなの幸せを実現していくために、自分はどう生きていくか」を問い続けることが、社会科の本質であると考えます。社会認識は、社会的事象の背景にある人の営みに目を向け、その根本にある人々の願いや情意に思いを致していくことで、はじめて深まっていくものである。子どもは社会的事象に出会うと、自らの目的をもち、観察や調査、資料の収集や分析を通じて追究を始める。その過程で、社会的事象に携わる人々の工夫や努力、苦心などについて考えることで、その人の生き様や、その根底にある願いに気づき、社会的事象を再解釈していく。また、対話をくり返す中で、「本当にそうなのか」「このままでよいのか」などと自ら問い、社会的な見方や考え方を働かせながら、社会的事象について自分なりに価値判断していく。私たちは、子どもがこのような営みをくり返すことで、社会に生きる人々の工夫や努力、思いやその根底にある願いに心から感動したり、自分自身の成長を実感したりして、自らの価値観を更新するとともに、自身の生活や行動を見つめ直していくと考えている。

また、私たちは、社会的事象に出合ったその子が、生活経験に裏打ちされたその子ならではの感性で社会的事象に携わる人の営みに目を向け、その情意にふれることで心が揺さぶられるのではないかと考える。その子ならではの見方や考え方で社会的事象に向き合う過程で、子どもは社会的事象を単なる「状況」ではなく、その子にとっての「状況」として再解釈していく。その結果、子どもがより切実感を伴って社会的事象を追究し、豊かな価値判断を行うことにつながっていくのではないかと考えている。また、こうした「心の動きを伴う経験」を内包する『その子らしく学ぶ』姿は、学級の他の子どもの『その子らしく学ぶ』姿と相互に作用し合っていく可能性も見出せるのではないかと考えている。このように「心の動きを伴う経験」がある学びを通じて、よりその子ならではの社会認識を深めた子どもが、自分自身の感性や価値観を豊かにしながら、自分自身の生き方を見つめ直していくことを願い、研究を進めている。

### 2. 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

本研究は、4年「ごみを出す その先に」(7月)、6年「平和の未来を紡ぎ出す～静岡空襲の声と記憶から～」(10月)、3年「いのちのめぐみ～しずおか牛にゆう物語～」(10月)の実践における子どもの学びのプロセスを分析することで、社会科における『その子らしく学ぶ』価値や可能性を探ることを目的とする。

#### (2) 研究の方法

- ①抽出児を設定し、そのとらえを明確にした上で単元を構想し、授業を実践する。
- ②抽出児を中心とした逐語記録やノート記録をもとに、抽出児や周囲の子どもは教材のどこに魅力や疑問を感じ、追究していったのか、「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」を視点として、子どもの学びのプロセスを分析していく。

### 3. 研究の内容

#### (1) 4年「ごみを出す その先に」(住みよい暮らしをつくる)

##### ①単元の概要について

ごみは、一般的に役目を終えた不要なものや役に立たないものとされ、前向きな印象をもちにくいものである。しかしながら、私たちは食事や勉強、仕事、娯楽など、生活と同時にごみも生み出している。いわば、ごみは私たち人間の「生活の証」なのである。一般に、ごみ集積所は10軒に一つ

の計算で設置され、その数は静岡市内だけでも約 17000 箇所にのぼる。排出された大量のごみは、日々収集作業員によって人間の腕一つで集められ、処理施設に運ばれる。人々の生活環境の維持と向上のため、ごみが安全かつ確実に集められている事実に出合うことは、子どもがごみの処理の事業やそれに携わる人に対する見方を広げるきっかけになると考える。中でも、自分の出したごみにいちばん最初に触れる他者であり、そのごみを直接運ぶ人である収集作業員との出会いは、ごみを処理する事業が自身の生活と強く結びついていることを実感し、衛生的で快適な生活環境にとってなくてはならないものであることを捉えていくことにつながるだろう。そこで、本単元では、ごみの処理に携わる収集作業員を材とした社会科授業を構想することで、本学級の子どもを支えていきたいと考えた。子どもは、追究の過程で、静岡市の家庭可燃ごみ収集業務を市より委託されている業者の M さんをはじめとした、収集作業員の方々と出会う。M さんらは、収集作業員として日々多くの苦勞を抱えながらも、絶対に無くならない仕事であり、ライフラインの最重要部分であると信念をもって仕事に励む。子どもは、仕事に立ち向かう収集作業員によって自分たちの生活が支えられていることに気付いていく。そして、これまでの生活経験の中では見えていなかった M さんら収集作業員の働く姿の裏側にある努力や苦心、信念や願いなどの情意に思いを致し、「このままでは…」「これでよいのか…」と自分に目を向けていくだろう。追究の中では、M さんら収集作業員が道路に落ちているごみも拾いながら業務にあたっていることや、収集作業員に協力しようと自らごみ置き場に立って収集を助ける地域住民が多く存在する事実にも出合っていく。仕事の範疇や立場を超え、誰かのために行動する人の思いにふれていくことは、自分にできることを見つめ始めている子どもを支えるものとなっていくと考える。

このように、ごみの処理に携わる収集作業員の働く姿とその背景にある人の努力や苦心に存分にふれていくことは、子どもが、ごみを処理する事業が果たす役割について考え、自分にできることを考えていくことにつながるだろう。こうした学びが、社会的事象に対する見方や考え方がより強まったり広がったりした子どもの「自分にも何かできないか」という希望を膨らめ、自ら社会に関わっていきたいという主体的社会参画への芽を育てていくことにつながっていくことを期待し、本単元を実践した。

## ②抽出児の『その子らしく学ぶ』～心の動きを伴う経験によってその子に還るもの～

### ア 自分にもできることを考えていく A 男

第②時、収集作業員について「だったら、ごみ（を収集車に）入れてる人くさくない？」「（給料は）安いんじゃない？だって運ぶだけだよ」「でも絶対にやりたくなくない？」などと発言していた A 男が、第④⑤時、実際にごみ集積所を見学に行くことが決まると、「雨だったらどうなのが見たい」「先生、話しかけてもいいのかな？」「サインもらっていいですか？」などと発言した。A 男は、収集車に投入されたごみがはぜる音を聞くと、「この仕事楽しそうだね。いつでも爆発音聞けるよ！」と話していた。これらのことから、A 男は、収集作業員の仕事に対する実際の思いに迫ろうとしていたことがわかる。

第⑦⑧時、収集作業員の M さんが「一番きついです」と語る、一日の業務を終えた収集車の洗車の様子を動画で視聴した。内壁にこびりついたごみを洗い流すために、車内に作業員が入っていく様子に A 男は、「うえええええ？うわあああああ！」と顔をしかめた。そして、映像であるが思わず服で鼻を隠し、「これガスマスクつけてないとおうわ」「これ人の…」「（洗車が終わっても）ちょっとはおうよね」と、大きな反応を見せた。この日、A 男は授業の振り返りとして、「もっと生活からごみを減らそうとしようとした。もっと生活からごみを減らそうと自分が気にしていきたい」とノートに記した。

記入後は、教師に「だってこんなに大変な思いしているのにさ」と話をした。M さんの話を受け、授業後の一番の思いとして「かっこよかった」「ありがたい」「過酷だと思った」と振り返った子どもが多い中で、「自分が気にしていきたい」と A 男は振り返っていた。この言葉からは、かねてより相

手の思いを自分の思いとして共有し、自分も何か行動できないかと動き出そうとする A 男ならではの価値観が感じられた。第⑨時、前時の M さんの話を振り返った際にも、A 男は「洗車がめんどくさい」「一日一日洗車してんのかな」と、洗車に対する発言を重ねた。A 男が発言する以前は、学級全体は大型連休などの祝祭日も含めて収集の仕事が止まることはないことについて話題となっていたが、A 男は話を戻すような形で洗車についての話題を持ちかけた。洗車の業務の厳しさが心に強く残っていた A 男は、日々市民の衛生的で快適な生活環境を守るべく厳しい業務にもあたっていく M さんら収集作業員の責任感を捉え、自分も収集作業員のために何かを行動に起こさねばと感じるようになったと考える。社会的事象に対して自分も何か行動できないかと思案することは、自分とみんなの幸せの実現に向け自分はどう生きていくかを問い続けていくという社会科の学びの本質に通ずるものであると考える。それは、自ら社会に関わっていききたいという主体的社会参画の芽を育てていくことにもつながっていくはずだ。

以上のように、M さんら収集作業員の業務の様子背景にある努力や苦心にふれ、自分にできることに目を向け始めていった A 男は、第⑨時、自身と同様、自分にできることがあると説く I 子の考えに出合った。I 子は、収集作業員が自分たちの排出したごみ袋を収集することに力を注いでいるため、その思いに応えるためにも学校の廊下などに落ちているごみを自分たちも拾うことに努めた方がよいと発言し、「想像以上だったのか、こんなはずじゃなかったと半日で仕事をやめていった人もいるってあったから、本当に集めるのが大変な仕事なんだ。私だったら半日もできない、もう数分でうわ、やだってなるから、そんな大変でくさかったり重かったりしてるのにずっと続けてるのがすごい」と語った。すると、A 男は席の近い S 男に自ら声をかけ、以下のようなやり取りをした。

A 男：ねえ、S 男、S 男、（収集作業員は）歩いたりするだけやん。

S 男：くさいよ。

A 男：歩いて（ごみを収集車に）入れるだけだから、体力的にはもってる。

S 男：もたねえよ。ずっと歩き回るんだよ。

A 男：えっ、なんで？ドライブするじゃん？

S 男：ドライブするよ。でも休みがないじゃん。

このことから A 男は、収集作業の過酷さは理解しつつも、その作業自体は単純なものだと捉えており、I 子の「本当に集めるのが大変な仕事」という思いに違和感を覚えたことがわかる。このやり取り以前に、第⑨時で M さんが願っていることについて、A 男は「『まちをきれいに』って言ってたやん」と話をしていたことから、市民の快適な生活環境をつくりたいという M さんの使命感にはふれているといえる。しかしながら、「収集員さんが頑張ってくれてるんだから、まちは。だからうちらがうちらで学校をきれいにすればまちもきれいになる」と話した I 子に A 男は「えっ、そんなことないよ」と返答していた。その後、U 男が I 子の発言を受け「I 子が言っているような行動を全員が意識してやれば…」と、I 子に共感する発言をすると、A 男は「意識してない人ー？」と、周囲に投げかけた。「自分にもできること」に目を向け始めていた A 男は、I 子の考える「ごみを拾い学校をきれいにすること」が、まちの環境美化のために本当にふさわしい行動かを吟味していたのであろう。「まちをきれいに」という M さんの努力や苦心、その根底にある願いを、学校内の環境と清掃の現状と関連付けて自分たちにできることを考えていた I 子と同じように、自分にもできることに目を向けていた A 男。I 子の考えには納得がいかない、でもそう感じているのは自分だけかもしれないと他の仲間にも問い直す姿からは、彼の心の動きを感じることができる。このような、自分とみんなとの差異を確認しながら、他の立場からはどうかと客観的に捉えていく A 男の考え方は、同じく第⑨時、かねてより大きな抵抗を示していた洗車について、全体の話題となった際に見せた以下の表れからも感じることができた。

T 男：ごみ収集員さんは、洗車するが一番辛いつて言ってたんだけど、まず収集車の中身超汚いしめっちゃくさいし、あとガスマスクつけなきゃ無理ぐらいのくささだと思うから大変だな

って思った。

A 男：ねえちなみにさー、ひとつ聞きたいんだけど、もし、収集の後、洗車しないで中に入って一日耐えられる？みんなは。一日。ずっと。

A 男は、まちの環境にとって本当にできることは何か、懐疑的に考えたり他の人の視点からも客観的に考えようとしたりすることで、A 男なりの納得解を模索しているように感じられた。単に受け入れるのではなく、別の視点から考え、自分なりのアプローチで模索しながら社会的事象について自分なりに価値判断していくことは、今後さらに複雑かつ不確実で多様化していくであろう社会の中で、よりよい社会を築いていくために必要な価値ある学びにつながるのではないだろうか。

このように、他者の考えとの矛盾に出合った A 男が、彼ならではの見方や考え方を働かせていく中で、第⑦⑧時の振り返りでも自身が述べたごみの減量に関する考えを以下のように表出した。

O 子：でもさ、ごみ収集作業員さんたちは、もし収集作業がこの静岡でなかったらどうなるかを考えていたから、自分がやんなきゃって思ったんじゃない？いなくなったら、みんなも想像がつくように、ごみの世界になっちゃう。だから収集作業員たちはやってくれてると思う。

A 男：ねえ、ごみを再利用できるんでしょ？ねえ、ごみでハヤシライス、ご飯作れないの？

教師：ごみで何かを作りたいってこと？

A 男：そう！ほこりで何か作りたい。

教師：ごみはごみ以外としてもいけるっていうこと？

A 男：生ごみを灰にして、食料を作るための肥料にもできるし、食べようと思えば食べれるし。あと固めたら石炭にもなりそうだし、燃料にもなりそうだし。

A 男は、第⑦⑧時で収集作業員の M さんに「ごみとはどのようなものか」を尋ねられた際、「いらないもの。…いらないものってか、使えるもの。意外と。使えるわ。リサイクルしましょう、ちゃんと。肥料にしましょうって」と発言していた。A 男は、そもそもごみは再生可能なものでもあり、ごみとしてではなく、再利用したり、再生使用したりすることで排出量を削減できるという見方をもっていたことがわかる。「肥料」という発言は単元で複数回見られ、第⑨時で「肥料あるとおいしくできるし養分を蓄えると美味しくできるからいいと思う。養分が甘みっていうらしいよ」とも語っていることから、生ごみを肥料にした栽培の知識も、A 男の考えに関係している可能性がある。

このように、A 男は教科書の写真資料や集積所見学だけでは知り得なかった収集作業員の M さんの話を通じて、業務の裏側にある「人」の努力や苦心に心動かされ、自分の生活や社会に対する考え方に変化し始めていった。その過程で、自身とは異なる見方や考え方、感じ方をもつ他者と自身との間に矛盾を感じ、本当にそうなのかと懐疑的に考えたり、他の人から見てもそうなのかと客観的に考えたりしようとした。その結果、A 男が第⑨時で、かねてより心にあった「自分にもできること」に対する思いを、ごみの再利用・ごみの減量という、より具体的な行動に目を向けていくことにつながっていった。彼は、収集作業員の M さんらに出会い、その情意にふれたことで、行動への意欲が生まれた。それは単なる共感ではなく、A 男は自身の生活の中で実際にどう行動できるのかを考えており、より社会の問題を自分のこととして捉えていたといえよう。このように、収集業務の過酷さや社会における責任を認識しつつ、仲間との対話を通して自分にもできることを探していった A 男の「心の動きを伴う経験」は、彼の社会認識を深め、社会的事象に対する見方や考え方を強めたり広げたりすることだけでなく、彼が将来的に自分は社会にどう関わり、どのように貢献していくかを考えるきっかけにもつながっていくのではないだろうか。

## イ 自分ならではの問いを生み出す B 子

第④⑤時、実際にごみ集積所に見学に出かける際、B 子は「雨なのに。でも雨なのに、収集とかするのかな？」とつぶやいていた。集積所でのごみの収集中は鼻を塞ぎながら見つめ、時折「えっぐ…」とじっと収集作業を見つめていた。

第⑥時、見学を振り返った際は、「収集員さん冷たそうだった」「やばかった」「今日（雨じゃない

から)行けばよかった」と話をしていた。しかしながら、0子の「ごみって自分のごみでも人のごみは絶対やりたくない。『何がなんでもとりに行く』って前にS子が言ってたけど、本当にそうなんだなって思った」と発言すると、「なんで収集作業員になろうと思ったんだろう。うちから考えるとデメリットのほうが多い。」とおもむろに話し始めた。見学時に目の当たりにした収集作業の過酷さに心を動かされたB子は、「自分だったら」という0子の視点を得ながら、次第に収集作業員が仕事をする目的に目を向けていった。次時、Mさんら収集作業員を学校に招いた第⑦⑧時は、授業中に大雨警報が発表される事態となった。Mさんは、このような場合でも基本的に市役所からの指示があるまでは仕事が止まることはないこと、仕事に臨む上で体調を管理するのも仕事であること、収集車に乗り込む3名が休んだ場合は、代替りの作業員が入ることを話し、「回収は必ずします」と話をした。すると、Mさんに続けて、「何が何でも回収する…」とB子はつぶやいた。B子は、収集作業員のMさんの思いにふれ、教室を後にしようとするMさんの元に自ら駆け寄り、「頑張ってください!」と笑顔で声をかけていた。また、次時の授業では「ごみのにおいがくさかったけど、そんな中でも、雨でも集めていてすごい。『何が何でも取りに行く』って意識していると思った。」と話した。B子にとってMさんとの出会いは、収集業務の過酷さと、その裏側にある「人」の責任感や使命感にふれる機会となり、彼女の心に深く刻まれるものとなった。

第⑨時、Mさんがごみ収集作業員の仕事を続けている年数について記載された資料を読むと、B子は「無理こんな続けられない。無理ー。無理だなあ。えー。」「昨日なんて(暑さが)絶対やばかった。凄すぎる、やだ、絶対倒れる。」と繰り返しつつつぶやき、大きく反応していた。B子は集積所見学の際、30分に満たない見学であったが鼻を塞いでいた時間が多くあった。このことから、Mさんが18年という長きにわたって仕事を続けているという事実には大きな驚きを感じるとともに、深く感嘆したことがわかる。これまでのB子の発言は、見学で知り得た事実に対するものが多くを占めていたが、そのようなB子が新たな問いをもつ場面として、以下のようなやり取りがあった。

I子：だったらうちらにもできることはあるのかなって思ったんだけど。だったら私たちにも…

B子：うーん。私たちにもできること…(ノートを開き過去のメモを見返す)

I子：うちらはうちらでやっぱり廊下のごみを拾ったりしてごみ袋の中身をちゃんとするのを頑張ったほうがいいのかって思った。

B子：えっ、一個ずつ(中身を)見てるのかな?ビンが入ったらシール貼らなきゃいけないから。

N男：パツ、パツ、って入れてるように見えた。

B子：だよな。だって、この前ごみの収集を見せてもらった時は、多分(袋の中に収集不可能なものが)もう入ってないことを承知して(収集車に)入れていたと思うんだけど、大雨の中行った時は、見てなかったような気もするけど、見てるのかなあ?

B子は次時でも「この前も言ったけど、一つひとつやっぱり見てるのかな。だってさ、もし大丈夫だろうって思って見てなくて収集車に入っちゃったらどうなっちゃうの?」と話していることから、B子はこの問いにこだわりをもっていることがわかる。収集作業員の苦労に直接ふれたことによって、ごみを排出する側の利己的な考え方でごみを収集する側の作業員に迷惑がかかったり、危険が及んだりすることがある事実により切実感を抱いたのではないか。このように、収集作業員との心理的距離を縮めたB子は、学級の仲間との対話を通して、新たな問いを生み出していった。

A子は最終時、ごみの分別について話題となった際、「当たり前が大切」と語ったS男の発言を受け、「ルールとマナーの違い…」と2度つぶやいた。「ルールとマナー」という言葉は、B子が日常生活の中でも何度か口にしてきた言葉である。相手に心地よく感じてもらうためのマナーと規則や決まりごとを意味するルールを区別して考えているB子は、相手が良い気持ちになるための行動を重視する彼女ならではの価値観を表出させた。多くの人が関わる公共的な場を維持するためには、利己的な考えや行動を見直していくことも求められる。このような学びのプロセスによって表出されたB子ならではの価値観は、市民としての責任感を高めていく社会科の学習として意義ある学びにつながっていくものであると考える。

## (2) 6年「平和の未来を紡ぎ出す～静岡空襲の声と記憶から～」(世界の未来と日本の役割)

### ①単元の概要について

本単元では、「静岡空襲」を教材に戦争と平和について考えていく。静岡空襲は、1944年から断続的に行われ、第二次世界大戦末期の1945年6月19日深夜から20日未明にかけての空襲が一番の被害をもたらした。アメリカ軍のB-29爆撃機123機により現在の静岡市街地に投下された焼夷弾は約10万発で、約2000人の命が奪われた。静岡市は市街地の66%を焼失し、本校の児童が通う附属静岡小学校も全焼した。現在の駿府城公園も当時は歩兵第三十四連隊の兵営として利用され、市民文化会館と中央体育館がある場所には静岡県監獄署が設けられていた。自分たちが住んでいるまちや通っている学校も空襲の被害にあったことや学校の周辺が戦争関連の施設として利用されていたという事実は、戦争をより切実に考えるきっかけになるだろう。単元の中盤では、静岡平和資料センターで語り部として活動する田中明充さんと出会う。田中さんは1歳の頃に静岡空襲を経験し、その際に頭部に火傷を負った。田中さんは「母親が手記に込めた反戦の思いを語り継いでいくことが使命である」と語り、『『戦争のこと、平和のこと』を語り継いでいってください」と次世代への願いも強く抱く。語り部と子どもが語り合う経験は子どもの感情に働きかけ、戦争や平和に対する認識をより深いものにしていくだろう。しかし、戦後生まれの人の割合は87.9%(総務省：2023年10月現在)となり、9割近くが戦争を知らない世代となっている。同時に語り部の高齢化も進み、戦争を次世代に繋いでいくことが大きな転換点を迎えている。この事実や語り部の願い、今も世界中で起きている紛争についてもふれていくことでこれからの平和の在り方に迫っていけるようにしたい。もちろん戦争は多くのものを奪い平和は尊いものであるという認識形成は必要不可欠であるが、そこに留まらず戦争と平和について多角的に理解し、自らの考えを形成することが重要である。その過程で培われた社会認識、見方や考え方は子どものホリスティックな学びを支えるだけでなく、子どもが将来にわたって戦争と平和について考える際の基盤となっていくだろう。このように、本学級の子どもが静岡空襲を通して戦争や平和の未来を考えていくことは、自分だけの幸せな人生ではなく、全ての人にとっての幸せな人生を見つめていく学びになるだろう。こうした学びが、複雑で多様な現代社会において自分自身や社会の将来を構築するために必要な資質や能力を培うことに繋がると考え、本単元を実践した。

### ②抽出児の『その子らしく学ぶ』～心の動きを伴う経験によってその子に還るもの～

第①時、焼夷弾の実物に出合い、静岡に空襲があったことを知ったのち、戦争のイメージを学級で共有している際にC子は以下のように発言した。

なんか、戦争のイメージはウクライナとかロシアとかなんか自分の知らないところでなんかやってるって感じはある。前までニュースでやってたけど、最近もうやってないからもう終わったのかなって思ってたけど、戦争から何年ってやってて、まだやってんだなって思った。

さらに第②時には、「静岡空襲によって駿府城・附属小・自分の家はどうなったのか？」という全体の問いをもとに調べ学習を始める際に、

ねえ、R子ちゃん。私の戦争材料が「ちいちゃんのかげおくり」だからね。「ちいちゃんのかげおくり」以外どんなんか全然知らない。あ、ウクライナ戦争のテレビとか。ガザ地区とか。

と、3年生の国語で学んだ「ちいちゃんのかげおくり」くらいしか戦争について知らないと自身のもっている戦争についてのイメージを友達に語った。第①②時のC子の表れから「戦争」というものについての知識は少なく、ニュースなどで情報は得ているが「まだやってんだな」という言葉からもわかるように、自分とはどこか遠くにあるものであるという感覚をもっていることがわかる。

ここ安西。ねえ、私っちこら辺。ここだ！ここだ！（Y子に見せる）安全だよ。まあ被害はあっただろうけど。で、私の家この辺。安西だから。あ、でも駿府城は安全だ！でも、飛び火はあっただろうけどね。



このように調べ学習を進めていく中で、C子は「自分の家の周り」「駿府城」はどうなったのかを中心に調べ学習を進めていった。特に、「自分の家の周りはどうなったのか？」という問いについては熱心にタブレットや静岡空襲についての書籍を調べていた。地理的・物理的に身近なものを拠り所に学び進めていく様子は、この後のC子の表れの中にも随所に見られ、「戦争」というものを自分事にして追究していく際の軸になっていると推察できる。

その後、調べ学習の中で、C子がじっくりと読み込むページがあった。(図1)それは、戦争経験者の体験談のページであった。そのページをじっくり読んだ後C子は以下のように発言した。



あ、おばあちゃん。(本の中の空襲経験者の写真を見て。その後空襲経験者の話を読み進める) ねえ、やばいやばい。「色白のトシコさんの胴体が南にある石垣に飛ばされていた」だって。「顔がえぐられた状態で」こわ。(Y子に対して) 見て大変だよ。ここでみんなで寝てたんだけど、男の一人はこっち行って、女の子こっち行って、一人だけここまで飛ばされたって…。怖くない？

図1. 戦争経験者の体験談を  
じっくり読み込むC子

戦争についての遠いイメージをもっていたC子であったが、静岡空襲によって自分の家の周りや学校の周りの様子がどうなったのかを調べていく中で、自分たちの住んでいる静岡市も空襲を受けたことを知り、少しずつ戦争や空襲が自分の身の回りに起こっていたことなんだという認識が芽生え始めた。さらに、戦争経験者という「人」にふれることによって、戦争は人の命を奪う悲惨なものであるという認識が深まっていたと考えられる。普段は明るく友達と話をしながら学び進めることが多いC子であるが、戦争経験者の体験談に意識を向けじっくりと読み込む姿や上記の発言から、C子の心の動きを捉えることができる。「戦争に対する知識やイメージが少ないこと」や「もともと人の思いに迫ろうとする」などの背景や見方が影響し、戦争経験者の体験談に出合ったことがC子にとっての「状況」となり、「心の動きを伴う経験」として、空襲当時の様子をより鮮明に映し出すものとなったのだろう。



図2. 戦時中12歳だった  
人の体験画

第③時で、静岡空襲を受けた時に、12歳だった人の戦争体験画(図2)をR子が全体に紹介した。その際に「これを当時の12歳だった子が味わったって考えるとさ…当時の人はどんな思いだったんだろう？」とR子は語った。それを聞き「絶望のような気持ち」「パニックになっていたんじゃないか」「生きる気力さえ無くなっていたんじゃないか」と発言した友達の意見に対し「意地でも生きてやるって思ったんじゃないかな？私が当時の人だったらそう思うよ。」と、戦時中の人の気持ちを自分の思いと重ねて話した。「意地でも生きる」という言葉からC子の前々からもっている「何事も楽しく」というC子らしい生きることに対する前向きな気持ちや生きることの大切さを感じることができる。

第④⑤時に、「静岡平和資料センター」へ見学に行き、語り部である井上さんの話を聞いた後に以下のように振り返りを記述した。

話していた場所が、自分の住んでいる所と近かった。結構近い場所ですんなり知ってびっくりした。(七間町、一番町、屋形町はいつもバスで通っている場所。七間町はその塾に行っている。) 現実味があった。私の予想では「たくさんの人が亡くなった。」だったけど、実際は焼け野原になっていた。がんばって生きてた。今では想像できない。

語り部の話を、C子が「自分の家の周辺」と結びつけながら聞いていたことがわかる。さらに「現実味」があったという言葉から、資料の情報以上に実際に戦争を経験した語り部からの言葉を受け止め、C子の中での戦争の認識がより切実感のあるものへと変容していると推察できる。それは、C子が語り部の戦争中の辛い思いや苦労、今の時代に願う思いなどの情意にふれC子の心が動いたからだと考え



える。

第⑥⑦時では、語り部の田中さんの話を聞きながら「戦争のことを考える時ってさ、戦争がなんで始まったかを理解しなければ難しいよね。」と発言をした。田中さんとの対話の中で、疑問や戦時中の様子が明確になっていく中での発言である。さらに、田中さんに対して「今アメリカは日本と協力というか仲いい感じだと思うけどそれをどう思いますか？」と質問した。C子の中で、次第に「戦争」というものの捉えが、「過去にあった一部分のもの」という「点」としての捉えから、「歴史的背景」「現在の情勢」など様々な要素が絡み合っているものであり、それらを理解することでより戦争についての捉えが深まると感じているからこそその表れなのではないか。

第⑧時では、語り部二人との出会いを通して感じたことを以下のように語った。

なんか空襲が起きたので私が知っているのは、広島とか大きなやつで、原爆が落とされたってことで、戦争から何年たちましたってTVとかで黙とうしているのだけで、そういうのしか知らなかったから、語り部の二人の話を聞いて、七間町とか一番町とか本通りとか言っていて、すごい近いじゃん。で、近くでそんなことが起こってるって知らなかったからすごいリアルに感じて怖かった。

間違いなく、C子にとって語り部二人との出会いは、「心の動きを伴う経験」となり、戦争という初めは遠い存在だったものが切実感を伴うものになり、戦争が二度と起きてはいけないものであるという認識が形成されていったといえる。

さらに、K子が「戦争のこういうことがあったのに、なんで忘れちゃいけないの？語り部の人が絶対に忘れちゃいけないって言っていて。なんでこんな悲しいことがあったのに忘れちゃいけないんだろう？」と全体に投げかけた。C子はそれに対して

みんな忘れてしまうと、未来でまた同じようなことをしてしまう。失敗は成功のもとというし、また同じ戦争（失敗）をしないように、しっかり伝えないといけない。

と記述した。C子は「戦争はいけないものである」という認識は深めていたが、K子の問いは、語り部の思いに立ち止まるきっかけとなり「未来に向けて」という新たな視点を与えるものになったといえる。

第⑨時では、Y男の「記憶がなくなっていくても、『もの』が残れば戦争の恐ろしさは伝わる」という意見や戦争経験者や語り部の数が減少していることがわかるグラフにふれ

戦争経験者は増やしようがない？戦争しないといけないってことじゃん。戦争なくすために語り部の人が話してくれたのにさ、戦争やっちゃだめじゃん。戦争経験者が減るのはどうしようもないし記憶が薄れていくのは仕方がない。だからこちらが伝えていけばいいんじゃないの？

と、未来に向けて戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えていく主体は自分たちにあることを強く認識し、全体へ発信していた。最終時の振り返りは以下の通りである。

改めて戦争がいけないことだと思った。戦争から79年経って、戦争経験者がどんどん減ってきている。それは仕方のない事だし、どうしようもないけど、未来で戦争が起きないためにも、どうにかして次につないでいかないといけない。今もイスラエル。ウクライナとロシアが戦争をしている。他にも戦争はしていなくてもケンカしているところがある。ただケンカしているだけじゃなくて、どうすればお互い少し我慢しつつ納得のいく結果になるか考えていく必要があると思う。

現状をしっかりと捉え、その解決に向けて考えを紡ぎ出すC子の姿があった。さらに、「どうすればお互い少し我慢しつつ納得のいく結果になるか考える」という、かねてより「共感的に他者を理解すること」に価値を感じているC子ならではの解決策を見出していく姿があった。これは「戦争と平和」という単元に留まらず「自分自身の生活」にもつながる姿であるといえよう。共感的に他者を理解するC子らしさが本単元を通して磨かれ、自身のよさを感じるきっかけになったのではないだろうか。

以上のように、単元の始まりでは「ロシアとウクライナの戦争まだやってんだなって思った」「ちいちゃんのかげおくりくらいしか知らない」と「戦争を遠いもの」と捉えていたC子が、静岡空襲に出合い「自分の家や学校の周りで起きた出来事」である事実がC子の「状況」となり、心の動きが生まれた。さらに、調べ学習を進めていく中で、実際の戦争経験者である人の体験談にも強く心を動かされた。このように少しずつ戦争がC子にとって切実感のあるものに変容していく中で、「語り部」という本物の戦争経験者に出会った。C子の言葉にあるように語り部の話を「現実味」があったと感じ、C子の中で戦争は悲惨で二度と繰り返してはいけないものであるという認識が彼女の学びとして形成されていったと考える。戦争を「自分の周りの地域」を中心に学び進めていったこと、単元の途中から「戦争経験者の思いに迫りたい」という思いを抱き始めていたC子だからこそ、語り部との出会いが「状況」となり、戦争が二度と起こしてはいけないものであり、自分たちにとっても遠いものではないという認識を強くしたといえる。また、K子の「戦争のような悲しい記憶をなぜ忘れてはいけないのか？」という疑問にも心を動かされた。今までC子の中に「語り部が思い出すことも辛いのに、伝えようとしていること」という視点がなかったためだ。そこから、C子の中に「未来の戦争と平和」についての視点が生まれた。その後「人の記憶として忘れてはいけない」という意見や「ものとして残っていればいい」という仲間の意見を聞いたC子は、「語り部が少なくなっていることは変えられないから、自分たちが伝えていけばいいのではないかと、自分たちがこれからの平和の担い手であるという思いを語った。

「家や学校の周りの出来事であったこと」「語り部の情意にふれる出会い」「友達のその子らしい視点からの問い」この単元を通して、C子の「心の動きを伴う経験」は随所に見られ、そこからC子は多角的に戦争や平和に対する認識を深めていくことができた。さらに、自分の家の身の回りがどうなっていたのか知りがっていたC子に古地図や空襲後の航空写真を提示することや、人の思いに迫っていたC子が語り部という戦争経験者に出会うことなど、C子のこだわっていた部分や知りたいと思っていたことをしっかりと支えることで、「心の動きを伴う経験」を保障できたのではないかと。ここには、その子が今どのような学びを進めているのかを教師がしっかりととらえることの大切さが表れているといえる。

また、本単元におけるK子の問いはK子だからこそその問いといえる。このように、他の子どものその子らしく学んでいる姿が他の子どもに影響していることもいえるだろう。学級で子ども一人ひとりに「心の動きを伴う経験」がある学びがあふれている（教師がそこを意識する）ことで、その子のその子らしい学びがより発揮され、さらに相互に作用し、本単元のC子とK子のようにさらに「戦争や平和」に対する認識の深まりや見方の広がりが見られるのではないだろうか。



図3. 「心の動きを伴う経験」を視点にみた本単元におけるC子の学びのプロセス

### (3) 3年「いのちのめぐみ ～しずおか牛にゆう物語～」(はたらく人とわたしたちのくらし)

#### ①単元の概要について

子どもにとって、給食の時間は一日の学校生活の中でも特に心が和らぐ楽しいひと時である。本学級では、子どもが机を班ごとにつなげ合わせ、仲間と自由闊達にコミュニケーションを取りながら給食を食べている。そこには、素直でのびのびとした一人ひとりの子どもの姿が表れている。

しかし子どもの心が和らぐひと時であるからこそ、好き嫌いや食べ方など、給食に対する子どもの価値観が如実に表れる場でもある。本学級では給食の時間に「おかわりジャンケン」が毎日のように行われ、食欲旺盛な子どもが白熱した戦いを繰り広げているが、その一方で、苦手なものを減らしたり残したりする子どもの姿も少なからず見受けられる。

本校では、給食の時間に静岡牛乳協同組合(静岡市葵区)が製造する「ふじの国から静岡牛乳」(以下、「静岡牛乳」という)が提供される。(図4)給食のある日にはほぼ毎日提供される静岡牛乳であるが、本学級では、この静岡牛乳が子どもの給食に対する価値観のズレを顕在化させる象徴にもなっている。例えば、牛乳が好きな子どもがいる一方で、様々な理由で牛乳をパックごと残したり、手は付けるが時間内に飲み切らず、最後は食缶に残したりする子どもも少なくない。こうした現状を課題に感じ「牛乳がもったいない!最後までしっかり飲み切ろうよ!」と呼びかける子どももいる。

しかし、片付けの時間になると食缶の中が残された牛乳でいっぱいになっているのが実状である。残った牛乳を食缶へ流し込む子どもの表情は一人ひとり様々だが、うつむき気味に牛乳を残す子どもの心の中には、多かれ少なかれその子なりに「よいことではない」という思いはあるはずである。そうと思いつつも、つい牛乳を残してしまう。このような子どもの姿にこそ、牛乳という「もの」に対する問題意識が内在しているのだと考える。その問題意識をその子にとって顕在化したものとし、仲間と共にその子らしく問題に向き合っていくことのできる学びを、社会科という教科を通して保障したいと考えた。それが本単元構想の起点である。

本単元では、給食に出される静岡牛乳を切り口に、その原料となる生乳を生産する「大畑牧場」と、その主である大畑良彦さん(以下、「良彦さん」という)の酪農家として働く姿を教材として扱う。静岡市葵区杉尾に所在する「大畑牧場」は、2024年現在市内に4軒のみ残る酪農家の1つで、4代目にあたる良彦さんを中心に家族の手で営まれる山間の小規模な牧場である。牛舎内では40頭ほどの乳牛が飼育されているが、この中でも生乳を搾乳できるのは、子牛を妊娠・出産する健康な「お母さん牛」だけである。

(図5)一般に飼育下の乳牛の寿命は18年ほどとされているが、何度か妊娠・出産を経験した牛は、生後7年程度で乳牛としての役目を終え、屠畜場へと出荷されるのである。良彦さんは、「生乳を出せなくなった乳牛を屠畜場へ連れていくときは筆舌に尽くしがたい、深い感謝の思いでいっぱいになる」と語る。このようにして生産された生乳は良彦さん自らが運転するトラックで山道を片道1時間以上かけて市街の静岡牛乳協同組合まで運ばれ、「静岡牛乳」として製品化されるのである。良彦さんは、「酪農は命を預かり命の大切さを知る、命と真正面から向き合う仕事」「牛乳は命のめぐみ」であると言う。本単元では、こうした良彦さんの情意にふれながら、酪農家として働く人の姿を、その仕事の様子を、「人の生きる風景」として子どもがその子ならではの見方や考え方を働かせながらじっくりと見つめていくことを大切にしたい。こうした学びが、子ども一人ひとりの感性を刺激し、地域で働く人の仕事と自分たちの生活が密接に関わっていることを理解するだけでなく、自分たちはまさに「いのちのめぐみ」を受けて生きていることに気付きながら、より豊かな社会認識を深めていくことにつながると考えた。



図4. ふじの国から静岡牛乳



図5. 大畑牧場の乳牛

## ②抽出児の『その子らしく学ぶ』～心の動きを伴う経験によってその子に還るもの～

第③④時、実際に乳牛の様子や良彦さんが働く姿を見るために、大畑牧場へ社会科見学に出かけた際、D子は牛舎の中で牛のえさやり体験をしながら以下のような表れを見せた。

- ・(子牛に餌をやりながら) かわいい。どんどん食べちゃうね。やっぱりかわいい！
- ・大人の牛って触れますか？結構慣れてるね。
- ・もーんちゃーん！ここにいるのは3匹ですか？(牧場スタッフの人に質問する)
- ・(良彦さんへ何か質問しに行こうとするが踵を返して) やっぱり牛を触るのが一番！
- ・(子牛を撫でながら) こっちの子は7月26日生まれ。寝てる。かわいい！

D子は、周りの仲間が牧場スタッフの人に質問をしたり、牛舎内の設備について説明を受けたりしている間も、ひとり、牛のえさやりにも夢中になっていた。仲間が牛にやり損ねたえさを目ざとく見つけると、手が汚れることもいとわず素手でかき集め自ら牛の口元へ運んだり、自分の体よりはるかに大きい牛に積極的に近づき、嬉々として体を撫でたりする姿は、日頃から生き物と触れ合うことを好むD子ならではの姿であるといえよう。(図6)



図6. 子牛を撫でるD子

牛舎のにおいについてE男が「くっさ！」と発言した際、D子は「ひどいねえ！」と反応した。牛舎に入った瞬間の表情から察するに、D子自身も少なからず牛舎特有のにおいには感じていたはずである。しかし、「ひどいねえ！」と怒るD子の言葉からは、そのにおいさえも牛という生き物の一部として受け入れ、彼女なりに牛の側に寄り添おうとする心根がうかがえる。

牛舎を出て、良彦さんから大畑牧場の概要、乳牛の品種や酪農家の仕事内容について話を聞いた際には、熱心に資料に目を通したり、何度もうなずいたりしながら興味深そうに話を聞くD子の姿が見られた。ときどき不必要な発言をする仲間を厳しく制しながら良彦さんの話に傾聴したり、熱心にノートにメモを取ったりするD子の姿から、少しずつではあるが「酪農」という仕事に興味を抱き始めている様子がうかがえた。また、昼食後に良彦さんからとれたての牛乳とヨーグルトを振舞っていただいた際、D子は、

- ・(良彦さんに対して) すごくおいしい！両方！また家族でも来たい！
- ・(S子に対して) いつも(給食で)飲んでいるのはこの牛乳だよ。この冷たいやつ。
- ・(牧場スタッフの人に) すごくおいしかった！

と発言した。良彦さんから受け取った牛乳入りの小さな紙コップを両手で大切に持ち、少しずつ口に運ぶD子の姿からは、先ほどまでの牛との触れ合いや見学した酪農の仕事を想起しながら彼女なりに「牛乳」というものを再解釈している様子がうかがえる。特に「いつも(給食で)飲んでいるのはこの牛乳だよ」という発言は、大畑牧場への社会科見学を通して「牛乳」について再解釈していることのあらわれといえよう。(図7)



図7. 牛乳を飲むD子

この社会科見学を通してD子は本物の牛の手触り、温もり、呼吸、またそのにおいなどを存分に感じると同時に、牛に寄り添い働く酪農家良彦さんの姿をじっくりと見つめていった。そして「牛乳」を通して、牛の命や良彦さんの仕事と自分自身の生活のつながりを感じていただろう。そこには、元来生き物の命を大切に思うD子ならではの見方や考え方が心の動きを伴って働いており、それがD子にとってのかけがえのない学びを成立させることにつながっていったと考える。

第⑤時は、良彦さんから入手した資料「良彦さんが毎日必ずする仕事」や、実際に良彦さんの仕事

の様子や流れを示した写真などを通して良彦さんの具体的な仕事内容を目に見える事実として確認し、そこから感じ取ったことや気づきを共有した。資料「良彦さんが毎日必ずする仕事」に出合った D 子は、良彦さん自身の朝食や昼食の時間が「仕事」の中に位置づけられていることに着目し、以下のように発言した。

D 子：なんか、この表を見ると、休む時間がない！ご飯（の時間）はあるけど休んでない！

D 子：なんか牛のためにご飯以外は休む時間をなくしてあげてと思う。

E 男：え、あるでしょ。

D 子：この表を見る限りだと！

R 男：ご飯食べるのに 1 時間もかからないはずだから、ご飯食べた後に休んでるんじゃないの？

D 子：私 3 時間くらいかかる。

（中略）

D 子：夜遅くまで仕事するんだから、たくさん食べなきゃ疲れちゃうよ。

R 男：健康チェックに 40 分かかる。えさやりは糞を投げてくんだから、その間に休めるんじゃないかな。

D 子：でも食いしん坊の子がいたからさ…

「なんか、この表を見ると、休む時間がない！ご飯（の時間）はあるけど休んでない！」と力を入れて発言する D 子の様子からは、まさに年中無休で牛に寄り添い続ける良彦さんに対する尊敬の念を抱き始めていることがうかがえる。また、周囲の仲間が「でも昼食のあと 1 時間以上時間が空いてるじゃん」と発言すると「でもさ、牧場と家が離れていてさ、家まで走っていく時間とかが含まれているかもしれないよ」と間髪を入れずに反論した。（実際には牧場と良彦さんの住居は隣接しているが、見学の際にはその位置関係を確認していなかった）さらに D 子は、朝食や昼食の時間が 1 時間程度しかないことについて、「私 3 時間くらいかかる」とつぶやいた。「3 時間」という時間はいささか誇張しているようにも受け取れるが、「自分は食事を摂るのに長く時間をかけているのに、良彦さんはたった 1 時間で食事や休憩を済ませて次の仕事に向かっているのだ」という D 子の解釈の表れといえよう。こうした D 子の姿から、自分自身の生活の在りようと比較しながら良彦さんの仕事の様子、そして生活の在りようを捉えている様子がうかがえる。（図 8）また、「でも食いしん坊の子がいたからさ…」というつぶやきは、大畑牧場への社会科見学の際に周囲の誰よりも牛のえさやり熱中し、牛がえさを食べる様子や一頭一頭の個性に目を向け観察していた D 子だからこそ発せられたものといえよう。社会科見学でえさやり体験をした時間はわずかに数十分であったが、その間に D 子は自分の感性を存分に働かせながら対象となる乳牛への関わりを強めていった。牛のことを「子」と呼ぶ表れは D 子特有のものであり、それは本単元の終末まで続いた。大畑牧場で出会った乳牛が D 子にとって単なる動物としての「ウシ」ではなく、愛着のある「子」になっていることがうかがえる。このことから、大畑牧場への見学や乳牛との出会いが D 子にとって「心の動きを伴う経験」となっていたと考える。

第⑧時の前半、あらためて資料「良彦さんが毎日必ずする仕事」や、社会科見学などを通してこれまでにに出合ってきた事実をもとに、「良彦さんは言葉通り 24 時間 365 日休む間もなく牛の世話をし

大畑良彦さんが毎日かならずする仕事

5:00	大きい牛のえさばこそうじ、大きい牛のえさやり 牛のフンを取りながら健康チェック (40頭いる牛を一頭ずつチェックする)
5:30	さく乳
7:00	大きい牛のえさやり
7:30	赤ちゃん牛のミルクやり
8:00	子牛(赤ちゃん牛より大きい牛)の世話 子牛のフンをとる
9:00	良彦さんの朝食
10:00	大きい牛、子牛、赤ちゃん牛のブラッシング (一頭ずつ毛をとかしたりよごれをとったりする)
11:00	大きい牛のえさばこそうじ、大きい牛のえさやり 牛小屋のそうじ
12:30	良彦さんの昼食
15:00	大きい牛のえさばこそうじ、大きい牛のえさやり 大きい牛のフンをどる
16:00	赤ちゃん牛のミルクやり
16:30	大きい牛のえさやり
17:30	さく乳
18:00	大きい牛のえさやり
19:00	大きい牛のえさやり 牛小屋のそうじ 牛のフンを取りながら健康チェック (40頭いる牛を一頭ずつチェックする)
20:00	良彦さん夕食

休む時間 ない!!

図 8. 資料への D 子の書き込み

続けている」という解釈を全体で共有した。この間、D子はしばらく黙ってノートや資料に目を落していたが、R男が「この資料を見る限りだと、良彦さんはほとんど休んでないでしょ、前も言ったかもだけど」と発言すると、素早く視線をR男の方に向けた。以下はその前後のD子の表れである。

S子：R男君が言いたかったことは、休憩があるとかないとかじゃなくて、毎日休まずに仕事を  
しているってこと。

N子：そう、1日の24時間の中で休む時間があるってことじゃなくて、24時間365日、あの、毎  
日毎日、(良彦さんが)生きてる日が、全部毎日が牛のえさやりとか掃除とか、牛のために  
働いているってことだと思う。

教師：そうか、24時間365日毎日が牛のため…

S子：うん、あの、牛は人間と同じ生き物だから…

D子：(S子の発言を聞きながら何度もうなづく)

D子：(略)でもYさんが休みなく働くのは牛からおいしい牛乳を分けてもらうためだよ。

S子の「牛は人間と同じ生き物だから…」という発言に何度もうなづくD子の姿は、日頃から生き物の命を大切に思うD子らしい表れである。しかし、後に続く「でも良彦さんが休みなく働くのは牛からおいしい牛乳を分けてもらうためだよ」という発言は、D子がこれまでの学びを通して「良彦さんはペット感覚で牛の世話をしているのではない」と、酪農家として牛に向き合う良彦さんの仕事における情意を感じとっていることの表れだと考えられる。D子は、酪農の仕事がまさに命に向き合う仕事であるということを、良彦さんの働く姿とその情意にふれることで学び取っていった。

第⑧時後半は、良彦さんが自身の仕事の中でも最も厳しい仕事だと語る「廃牛」の様子を動画で視聴した。動画を見始めたD子は時々微笑みながら「何してるんだろう？お散歩かなあ？」「うわー、良彦さん引っ張ってる！」などと発言していた。しかし、それが「廃牛」という仕事の様子であることがわかると、D子はそれまでの柔らかい表情を徐々に硬くしていった。さらに、教師が資料「良彦さんの話②」を範読すると、「もう牛乳を出せなくなった牛は「廃牛」といって、この牧場から送り出します」の箇所ですら「ううっ」と小さく声を上げ、両手を合わせて口元を抑えるしぐさを見せた。(図9)そして教師の範読が終わりにかけると、おもむろにペンを取り、ノートに資料「良彦さんの話②」の全文を丁寧に書き写し始めた。(図10)これまで、配られた資料をノートに書き写すことなどしなかったD子が、このときに限りこうした表れを見せたのは、「廃牛」という事実との出会いが彼女自身にとってインパクトを伴うものであったからであろう。さらにD子は、資料を書き写すだけでなく、廃牛の仕事に臨む良彦さんの心情について、「かなしい・きびしい気持ち」と書き添えている。D子は良彦さんの仕事に向き合う姿を見つめ、人の情意にふれながら社会的事象について再解釈・価値判断していった。このような姿から、本単元のプロセスそのものがD子にとってかけがえのない学びとなっていることがわかる。さらに最終時、D子はノートに『「命のめぐみ」は、命と命をわけあっているような気がします』と、自身の気づきを記している。この気づきこそ、本單元における「心の動きを伴う経験によってD子に選ったもの」の一端であるといえよう。



図9. 資料を読み込むD子

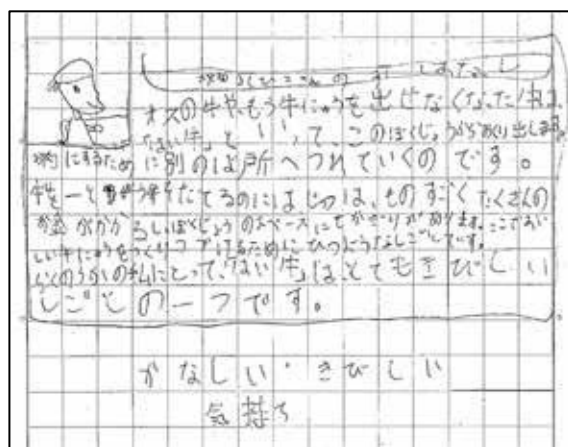


図10. ノートへのD子の書き込み

#### 4. 社会科が見出した『その子らしく学ぶ』研究の価値や可能性～心の動きを伴う経験によってその子に還るものを視点として～

##### (1) 社会科における『その子らしく学ぶ』研究の価値

###### ①『その子らしく学ぶ』ことは、社会科の本質を通り、一人ひとりの学びがより豊かになっていく

4年「ごみを出す その先に」の実践において、A男は、実際の見学やMさんの話を通じて、ごみの収集業務の裏にある努力や苦心にふれ、ごみの収集に携わる事業や自らの生活への見方が変化していった。他者との対話を通じて、最終的にA男が「ごみの減量」や「再利用」といった具体的な行動に目を向けるようになった姿からは、収集作業員の姿を通して、社会的事象を自分の課題として捉えるようになったことがわかる。これは、創造的な視点と社会の中で自分の役割を探る意識といったA男ならではの感性で材と出会ったからこそ見られた姿でもあるといえる。

6年「平和の未来を紡ぎ出す～静岡空襲の声と記憶から～」の実践において、C子は、単元の初めには「戦争は遠いもの」という捉えをしていた。しかし、「心の動きを伴う経験」を単元を通してしていく中で自身の「身近な地域がどうなったのか知りたい」「当時の人はどんな思いだったのかに迫りたい」という思いをもとに追究を進めていった。そして語り部の情意にふれることでC子の情意が動き「戦争は身近なものである」「戦争が未来で起こらないようにしなければいけない」「自分たちが平和の担い手である」と戦争や平和に対する認識を深めていった。それは「心の動きを伴う経験」がC子の『その子らしく学ぶ』を豊かにし、C子ならではの学びが展開されていったといえる。「心の動きを伴う経験」がある学びとは、社会科でいう子どもの情意が動く学びとつながるものであり、情意が動くことによりC子は戦争・平和についての認識を深め見方を広げた。それは「自分の生き方を見つめ直す」という社会科の学びの本質そのものであるといえる。

3年「いのちのめぐみ ～しずおか牛にゆう物語～」の実践において、A子は単元前半、「生き物にかかわることが好き」という自身の個性を発揮しながら「大畑牧場の乳牛」という対象に関わっていった。またその過程で、牛一頭一頭の個性やその違いに気づくとともに牛特有の臭いや糞尿でさえも「牛」という生き物の一部として受け入れ、A子なりにその生命の尊厳に思いを致していった。そうしたA子だからこそ、実際に大畑牧場の乳牛を試飲した際「すごいおいしい！また家族でも来たい！」という感動を得ることができたのだろう。この感動こそ、A子ならではの「心の動きを伴う経験」によってその子に還るもの」といえるだろう。さらに、単元を通してA子は、酪農家として「命」に向き合い続ける良彦さんの仕事に臨む姿やその情意に思いを寄せていった。第⑤時での「なんか、この表を見ると、休む時間がない！ご飯（の時間）はあるけどほとんど休んでない！」という発言や、第⑧時の「でも良彦さんが休みなく働くのは牛からおいしい牛乳を分けてもらうためだよ」という発言、さらに「廃牛」の様子を目の当たりにした後の資料への書き込みなどは、良彦さんの具体的な仕事の様子を見て、その情意にふれたことでA子自身の情意も揺さぶられていったことの表れといえる。こうしたプロセスを経て、A子は牛乳の生産過程や良彦さんの働く姿といった社会的事象の追究を通して『命のめぐみ』は、命と命をわけあっているような気がします」というA子ならではの気づきを得ている。

以上のように、「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの」という視点で子どもの学びのプロセスを分析していくと、そこにははっきりと社会科という教科の学びが成立していることがわかる。

###### ②その子の『その子らしく学ぶ』を生かす授業は、他者の『その子らしく学ぶ』に影響する

4年「ごみを出す その先に」の実践では、A男は、I子の「学校をきれいにすることがまちの美化につながる」という考えに対し、本当にそうなのかと自らの疑問を投げ返したり、「意識してない人ー？」と仲間の考えを確認したりしようとしていた。I子ならではの考えが、A男の考えを広げ、深める役割を果たしていると考ええる。他者との対話を通じて感じた違和感や矛盾について懐疑的に考えたり、周囲の意見を参考にして客観的に判断しようとしたりするA男の姿勢は、社会科が目指す「自分とみんなの幸せの実現」に向けた学びの本質につながっている。このように、I子が示した



I 子ならではの発言は、他の子どもに新たな視点をもたらし、社会や自分の生活に対する多様な考え方を生み出すきっかけになったと考える。

6 年「平和の未来を紡ぎ出す～静岡空襲の声と記憶から～」の実践では、K 子が「戦争のような悲しい記憶は忘れてはいけないのか？」という問いを投げかけたことで、C 子の中には「語り部がなぜそこまでして戦争の記憶をつなげようとしているのか？」という思考が生まれ、「未来に向けて」という視点で戦争や平和についての認識を深めていった。さらに、Y 男の「記憶が残らなくても、ものが残ればいい」という考えにもふれ、戦争経験者が減っていく未来において「記憶がどんどん薄れていくのは仕方がない事。だから私たちがつないでいかなければいけない」という未来の平和をつくるのは私たちであるという認識も獲得していった。K 子も Y 男もそれぞれの背景や見方があっての解釈であり、その子のその子らしさが学級に広がることで、今回のように C 子の認識の深まりや見方の広がりが見られるのだといえる。

## (2) 社会科における『その子らしく学ぶ』研究の可能性

「心の動きを伴う経験」によって、子どもは自分の生き方を見つめ直し、自分の行動への意志を高めていくのではないかと考える。

3 本の実践から、「本物との出会い」や他者との対話などを通して、子どもは「心の動きを伴う経験」をしていることが見えてきた。とりわけ、社会科においては、驚きや感動、共感や疑念、葛藤といった情動がきっかけとなり、その子にとっての「状況」が「情況」へと変容したことで、心の動きが引き起こされていくと考える。こうした心の動きは、単なる感情的反応にとどまらず、自身の生活や行動を見つめ直すきっかけとなり、子どもの具体的な行動への意志を育むことにつながっていくのではないかと考える。A 男の事例では、収集作業員の努力や苦心を知ることが感覚的な共感を生み出し、その結果、自分の生活や行動を見つめ直す意識が生まれ、他者との対話によって、自分自身の行動に活かそうとする姿勢がより強いものとなっていった。また、C 子の事例では、第⑨時での C 子の「だからこちらが伝えていけばいいんじゃないの？」という発言が表すように、語り部の情意に心を動かされながら戦争の悲惨さにふれたり、語り部が減少しているという社会的事象を捉えたりすることを通して、自分自身ができることを考え、行動を変容させようとする姿が見られた。

以上のように、「心の動きを伴う経験」によって、子どもは社会的事象に対する理解を深めていくだけでなく、自身の行動を変える意志へと結びつけていくといえるのではないだろうか。「将来にわたって自分とみんなの幸せを実現するために自分はどう生きていくか」を実現する社会科の本質として、行動への意志の高まりは、主体的社会参画への意識の芽生えにつながっていく可能性を感じている。

## 5. おわりに

研究 3 年次にあたる今年度は、4 年「ごみを出す その先に」（7 月）、6 年「平和の未来を紡ぎ出す～静岡空襲の声と記憶から～」(10 月)、3 年「いのちのめぐみ～しずおか牛にゅう物語～」(10 月)の実践を通して、社会科における『その子らしく学ぶ』子どもの姿を追究してきた。結果、『その子らしく学ぶ』ことで、社会科の本質を通り、一人ひとりの学びがより豊かになっていくこと、「その子の『その子らしく学ぶ』を生かす授業は、他者の『その子らしく学ぶ』に影響する」ことが成果として挙げられた。一方、『心の動きを伴う経験』によって、子どもは自分の生き方を見つめ直し、自分の行動への意志を高めていくのではないかと、ということが、今後の研究課題として見出された。また、子どもの心の動きを生じさせるきっかけとなる「本物との出会い」とは何であるのか、どのように出会わせることがその子にとってよいのか、子どもが社会的事象の中にみられる人の情意に迫っていくことのよさとは何かについても、今後の研究で明らかにしていきたいと考えている。

以上、研究 3 年次の研究成果・課題を踏まえつつ、これからも目の前の子どもの姿を軸に、社会科における『その子らしく学ぶ』ことの価値を見出していきたい。